

いやす
なおす
たもつ



文書館資料にみる
病気・医療・健康

2

萩藩医たちの「譜録」（毛利家文庫 23 譜録）

医師と人々②

「譜録」にみえる藩医たち

萩藩・徳山藩ともに、系図や藩士の略譜を書き上げた「譜録」という記録があります（以下、「譜録」は萩藩のものを、「徳山譜録」は徳山藩のものを示します）。いずれも藩士の活動を知るための基礎資料です。ここでは、それらから窺える藩医たちの姿を明らかにしてみましょう。

まず、藩医となった人々は、どのような理由で医学を志したのでしょうか。

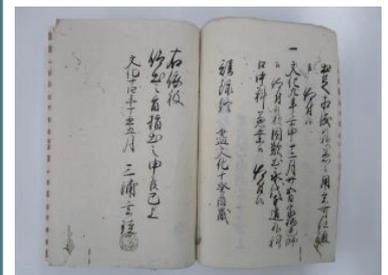
もっとも一般的なのは、藩医の家の跡継ぎが医学の道に進む場合です。しかし、「譜録」や「徳山譜録」に掲載された系図などを見ていると、医学とは縁のない家において、自家を継ぐことのない男子が藩医の養子となる場合があります。あるいは、自立を目指して、医師を生業として選択する者もいました。

彼らの医学修行の場は、上方（特に京都）と江戸が双璧をなしています。そうした地で有名・無名の師につき、医学を学びました。特に「譜録」には、萩藩に縁の深い土生（はぶ）家や曲直

瀬（まなせ）家の門弟となるケースが散見されます。なお、幕末には長崎が修行の地に加わってきました。西洋医学の流入にともない、新知識を求めている行動と言えるでしょう。

修行を重ねて実績を積んだ医師たちは、ある時は大名にその腕を買われ、またある時は他の大名や師匠などの紹介によって、萩や徳山の藩医となっています。俸給は、人や時代によってまちまちですが、25 石から 200 石程度が標準的でした。

藩医には、本道医（内科）、外科医（外療医）、針医、口中医、眼科医がいました。多くがその科を専門的に扱っていましたが、中には複数の科をかけもち場合もありました。例えば徳山藩医の三浦直信は、「本道・外科、口中兼業」とあります。内科と外科とを兼務するという家柄自体、今日的感覚からすれば驚きですが、彼はさらに口中までも診ることができる医師とのこと。当時の



徳山毛利家文庫「譜録」1113

本文で示した三浦直信の譜録のうち、その職歴を記した部分。文化4年（1807）に藩へ願ひ出て、「本道外科口中兼業」を許されています。

藩医は医療全般、オールマイティな知識と技術が求められていたのでしょう。

なお、「譜録」には「儒医」という家もありました。医業を極めながら儒学にも精通した医師のここのようです。例えば、道家玄中は、5代藩主毛利吉元が幼少の折、学問を指南していました。当時の医者は、一級の知識人でもあったことが窺えます。

藩医たちの使命は、藩主とその家族の健康管理と、罹患した際の治療に全力を尽くすことにあったのは言うまでもありません。幕末には、藩主の娘に種痘を施した藩医もいました（徳山藩浅田哲顕の例。本紙右下の写真を参照）。

しかし、いつも藩主とその家族の周辺に近侍していたわけではなく、そのほかにも多くの仕事を持っていました。

例えば江戸詰めを命じられた場合、江戸藩邸が罹災する場面に遭遇することもあったでしょう。そうした場合、速やかな藩邸の復旧作業に入るわけですが、その作業中、従事者の中にはケガをする者、病気になる者も出てきます。藩医は彼らの治療にもあたったのです。こうしたことは、幕府から藩が命じられる土木工事の場合も同様です。例えば萩藩の場合、幕命により利根川の普請事業を行っていますが、藩医は現地における医療活動にも従事しています。

また国元には多くの人々が訪れます。幕府の役人が来藩した際（藩主幼少の折に派遣される国目付や、将軍の代替わりにあわせて派遣される巡見使など）には、彼らの「万が一」に備え、その傍らに控えていました。また、朝鮮通信使の藩内通行や大陸からの漂流民があった場合には、下関や上関、あるいは漂流地へも出向いて、病人・ケガ人の治療にあたっていました。

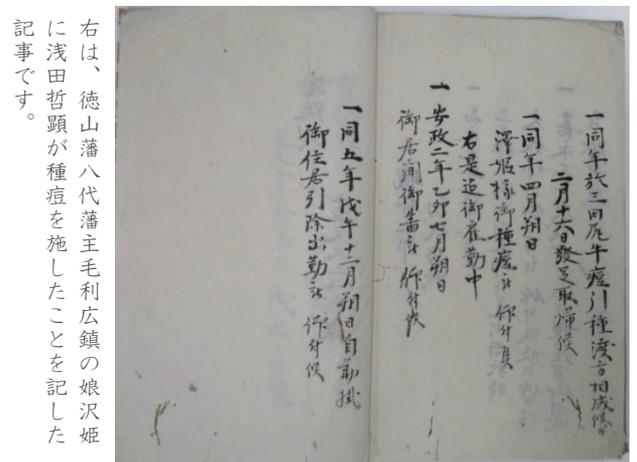
医業という特殊能力が求められる以上、藩医の家の継承は一般の藩士と同じではありませんでした。子息が医業に関心を持ち、相応の知識と技能を持っていれば問題なく家を伝えられますが、いつもそれが叶うとは限りません。そうした場合、養子を迎えて家を継承させる方法を探ることになります（その場合、実子は養子に出すか、別に家を立てています）。この時養子に選ばれるのは、既に医業の心得のある者や、医師の家（藩医に限らず、村や町の医師や浪人の医師など）の出身者が多いのですが、時にはそれ以外の、一般の家の子息を迎えているケースも見られます。この場合、養子となった後、医学を学んだことでしょう。なお、医業という特殊能力を持っていることを理由に、藩士の家が再興を許されたと思われるものもありました（この家はその後藩医として仕えています）。

一方で、医師として召し抱えられながら、その家業から離れる者もありました。例えば、萩藩士の吉村攻守（棋士として名高い吉村真甫の子）は、江戸で医術を学んだ医師でもありました。しかし、その子には医家としてではなく家を継げるよう藩に願い、許されています。医業の特殊性から来る難しさを考えてのことかもしれません。

「譜録」と「徳山譜録」をひもとくと、多種多様な藩医の家と人々の姿を窺い知ることができるのです。



徳山藩医たちの譜録（徳山毛利家文庫「譜録」）



右は、徳山藩八代藩主毛利広鎮の娘沢姫に浅田哲顕が種痘を施したことを記した記事です。

徳山毛利家文庫「譜録」30 浅田宗栄